★「武蔵国府寺」創建伽藍の復元（訂正版１）

川瀬健一

８月の末に投稿した「武蔵国府寺」創建伽藍区画溝の発見と創建伽藍の復元には根本的な事実誤認がありましたので、ここにまず訂正させていただきます。

●南門の東西に南北方向に走る二本の溝は創建伽藍区画溝ではない

南門の金堂院伽藍中軸線から 4m東に、南北方向で南門のすぐ北側を走る伽藍区画溝（GH 線）に交差する幅約２ｍの溝を「武蔵国府寺」創建伽藍の伽藍外郭溝とし、さらに南門の金堂院伽藍中軸線から西に 7.6mのところで伽藍区画溝（GH 線）に交差する幅約１ｍの溝を「武蔵国府寺」創建伽藍の寺域区画溝としました。

しかしこの二本の溝を示した図（『国分寺創建』の「武蔵国分寺」の論文に掲載された「図６　南門地区全体概略図」）を再度精査した結果、この二本の溝は伽藍区画溝ではなく、「金堂院」（＝「武蔵国分寺」とされた伽藍）の参道の両側に敷設された溝または、参道の両側に敷設された掘立柱塀の柱を抜き取った後の穴の連続ではないかという結論に達しました。

この結果、南門の東西にある南北方向の溝から、「武蔵国府寺」創建伽藍の伽藍域や寺域復元するという構想は不可能となりました。

「武蔵国府寺」の伽藍を復元する手掛かりは、創建伽藍のものと考えられる塔１とこの塔から東・南に 42m離れて存在する大溝（伽藍南辺区画溝）とさらに塔１から 90m離れて東西に走る大溝から、そして 9 世紀中頃の焼失後の再建期に出現した塔２の存在から復元するしかなさそうです（これについては別に報告します）。

まず図６をよくご覧ください（あちこち書き込みがありますが）

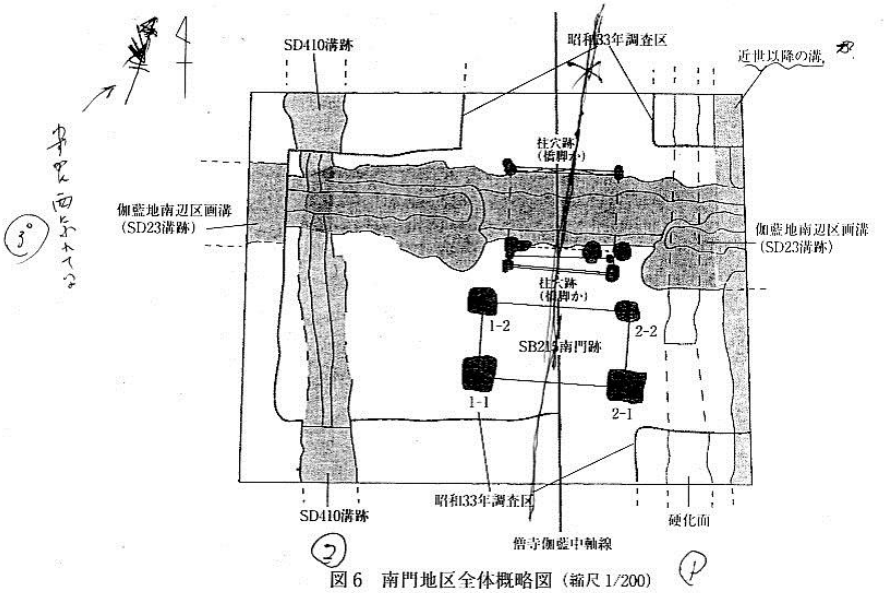


図６　南門地区全体概略図（縮尺 1/200）

●こう結論した理由ー二つの溝は「金堂院」の中軸線に並行している

図６をじっくり見てください。

この図は不整形な不思議な図で、まず左上にある北を示す図がわずかに西に３度ほど傾いていて、図の上が北を示しているわけではないことを念頭に置いてください。

この図で正しく南北を指している線は、図の左側の縦線。そして図の右側の縦線は、「僧寺伽藍中軸線（＝「金堂院」中軸線）と平行となっており、この線は真北に対して西に約７度傾いています。したがって図の上と下の線もまた東西を指しているのではなく、北に約７度傾いた線です。

この図の中で方位が正しく正方位を指している線は、南門跡の礎石の柱中心を結んだ長方形です。

以上を念頭に置いてみてください。

南門の西に南北に走る溝（SD410 溝）も南門の東に南北に走る溝（硬化面）もそれぞれ伽藍南辺区画溝（SD23 溝跡＝この大溝がほぼ東西に走っています）に直交するのではなく、「僧寺伽藍中軸線」に平行に走っていることに気が付きます。特に西側の SD410 溝はそうです。

伽藍南辺区画溝、この溝こそ塔１・２の南４２ｍのところを東西に走る「武蔵国府寺」創建伽藍の伽藍内郭区画溝を「金堂院」創建時に北と西に拡張した溝なわけですが、この溝に南北に直交していると判断したからこそ、この二本の溝をそれぞれ伽藍外郭区画溝と寺域区画溝と判断したわけですが、この二つの溝が伽藍南辺区画溝に直交するのではなく、僧寺伽藍中軸線に平行に、つまり西に 7 度ほど傾いて交わっているのですから、この南北方向の二本の溝が「武蔵国府寺」創建伽藍の伽藍外郭区画溝・寺域区画溝という想定そのものが成り立たなくなりました。

●二本の溝は何か？－「金堂院」の参道施設では？

となるとこの二本の溝の正体が気になります。

まずすぐに頭に浮かぶのはこの二本の南北溝が僧寺伽藍中軸線に並行して走っており、その中間の少し東寄りに南門があるのですから、この溝の中間の平たん地は、「金堂院」の参道であって、東西の溝がその参道に伴う溝、もしくはこの溝が直線ではなくあちこち膨らんだりすぼんだりしていることから、参道に伴う掘立柱塀の柱を抜き去った後にできた溝ではないかと想定できます。

ただこう考えると、二つの溝の間の平たん面は、伽藍南辺区画溝のところでは距離は 11.6mとなりますが、直線距離をあちこちで測定してみると、その二つの溝の端の距離はおよそ 10mとなります。つまり「金堂院」の参道の幅は 10mとなります。

しかしこの幅は「金堂院」の南門の柱の間隔が 4.5mであることと釣り合いません。そして南門跡の北側の溝にかかる橋の幅も３ｍほどですから、10mとはあまりに広すぎます。

では何なのか。

これを考えるために、同じく『国分寺創建』の武蔵国分寺の項の中門の箇所を精査してみました。そこには（Ｐ３２７）こうありました。

「中門跡の南正面には SD397 溝跡（「金堂院」をめぐる塀の周りに廻らされた大溝）の手前から南に延びる東西幅約 4.0mの参道状の硬質面が確認されたが、白色粘土を多く含み、出土遺物から９世紀中ごろ以降の築造と考えられる」と。

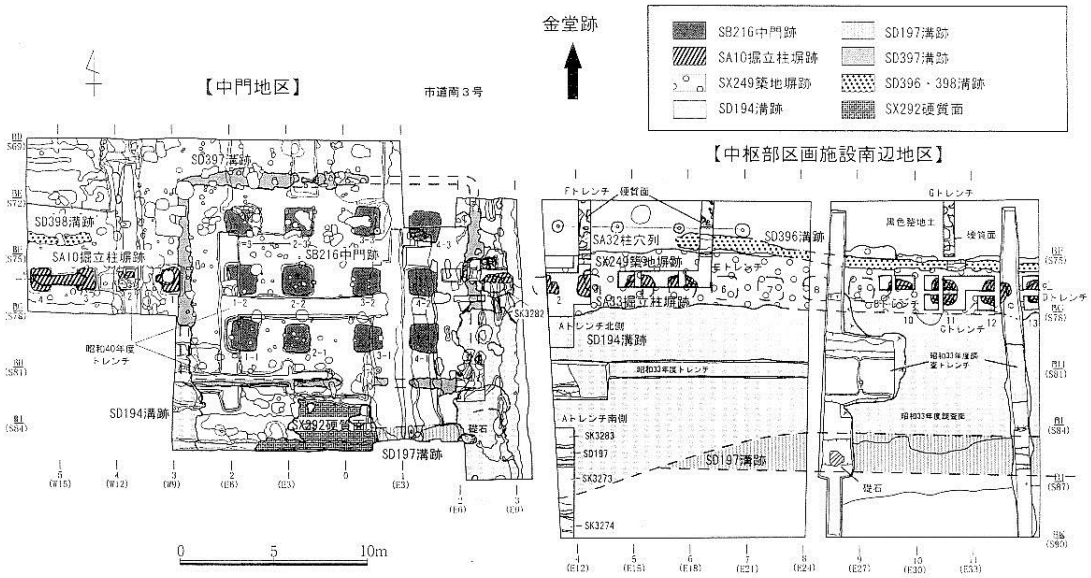


図４　中門地区および中枢部区画施設南辺地区全体概略図

中門の前には幅約 4mの参道があり、この築造は「金堂院」が焼失した後の再建時に多く使用された白色粘土を含むとともに、出土遺物が 9 世紀中ごろのものであったことから、焼失後の再建期につくられたと判断されているのです。

この幅 4mの参道が重要です。

なぜなら南門の幅は４．５ｍ。そして南門のすぐ北で伽藍南辺区画溝にかかった橋の幅が４ｍ。これらの事実から再建後の「金堂院」の参道は幅４ｍであったことがわかります。

では南門の両側に幅約 10mの距離を置いて存在する二本の溝とその間の幅約 10mの平たん面は何であったのか。　私の想定は、「金堂院」院が最初に作られたときの参道は幅が約 10mであったのではないかというのが最初の想定でした。

こう仮定して、参道についてほかに記述がないか見てみました。

残念ながら『新修国分寺の研究』『国分寺創建』の二つの本にある「武蔵国分寺」についての論文は参道についてはこれ以上の記述がありませんでしたが、福田信夫著『鎮護国家の大伽藍　武蔵国分寺』には、これ以外に参道についての記述がありました。すなわち、Ｐ７８に、「1999 年に金堂中心から南に 485mのところに参道口遺構が発見され、その門と思しき遺構は、柱間 4.34mの二本柱であった」と記述されていました。

図 48 ● 参道口遺構

この「国分寺参道口」の門の柱の幅が 4.34mという記述。

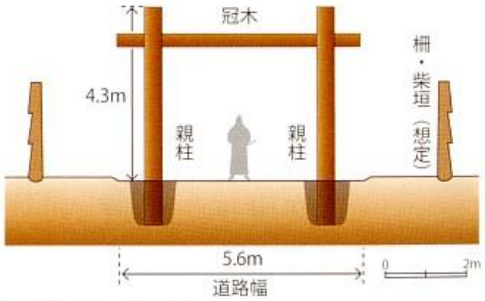
先に見た中門前の参道の幅約４ｍ、南門の柱間 4.5mとぴったり一致しています。焼失後に再建された「金堂院」の参道は実に 4m幅であったことは確実です。

では約 10m幅の溝とその間の平たん面は。どうみてもこれも道です。しかしこれが「金堂院」最初の参道であったという証拠は見つかりませんでした。

●補遺：異なる二つの時期の参道の存在？

国分寺市のふるさと文化財課が編集した冊子に「見学ガイド　武蔵国分寺のはなし」というとてもよくまとまった小冊子があります（「武蔵国分寺跡資料館」で販売されています)。ここに参道についての最新の知見と思しき記述がありました（Ｐ77)。

これによると参道は、僧寺中軸線上に位置して南門から南に向かっており、この道には側溝がなく、幅約 9.9mで並行している柱間 3.2～3.8mの柵を伴い、その柵の中間の幅 5.6mが凹地となっていてさらにその中央 2.8mが非常に硬い硬質面となる特異な構造であるとあります。

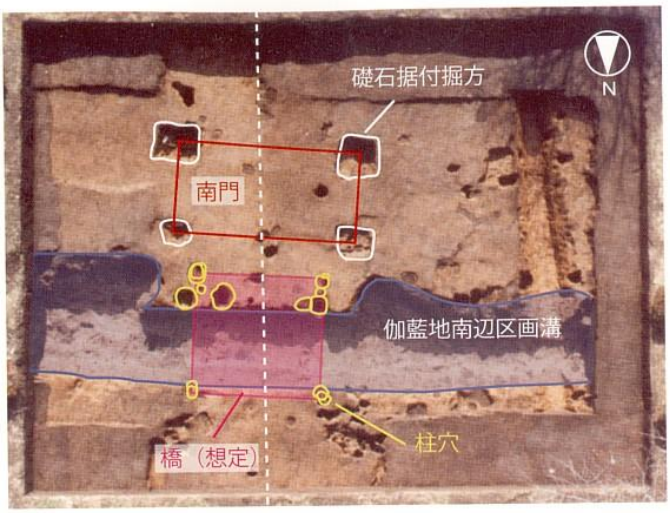


●― 参道口推定復元図

府中市埋蔵文化財調査報告第 30 集　武蔵国分寺跡調査報告 6 / 府中市教育委員会発行を元に作成

この柵の距離 9.9mが重要です。

先にみた南門の東西に南北に僧寺中軸線に並行して溝の幅やおよそ 10mであったからです。この小冊子のＰ60 には発掘された南門付近の写真がありました。



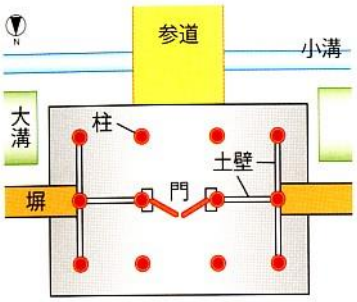
●― 南門跡の調査区全景

この写真は南北が逆に掲載されていますが、南門の西側の大溝には溝の底の両側におよそ 3mほどの

間隔を置いて二つの柱穴が連続していることが見て取れました。やはり南門の西側の南北溝が、参道を区切る柵というか塀のあとだったのです。

この小冊子には、中門前で検出された参道についての記述もありました。

中門の中央の柱の間、距離にして 3.6mのところには大扉があり、その南側には幅約４ｍの参道があったと図示されていました（Ｐ56)。



●― 中門の平面模式図

しかし中門前の参道の幅が約４ｍであることと、南門の南で発見された参道の幅が最大で 9.9mあり、その中に 5.6m幅の凹地があってその中央に 2.8mの幅の硬質面、つまり道があったという事実との齟齬については全く説明されていません。そして参道口の門が高さ幅ともに 4.3mであるという事実との関係も説明されていませんでした。

しかし先に中門前の幅 4mの参道が出土物から 9 世紀中ごろ以後の、つまり「金堂院」焼失後の再建期の築造であるという事実を元にすれば、中門前の幅４ｍの参道・幅 4m超の南門、そして幅 4m超の参道口の門はすべて焼失後の再建時のものと判断でき、なぜこれらの中間にある南門付近の参道がが幅 9.9ｍの柵で区画され、その間に幅 5.6mの凹地をつくりその中央に幅 2.8mの道があるという事実は説明がつきません。

二つの異なる時期の参道が掘り出されたのか。それとも伽藍内郭と外郭さら外郭のとの寺域では参道の形態が異なっていたのか。最新の報告書でどう説明されているのか楽しみです。

（２０１６年9月２０日）